
歌って！ オンガクの妖精！

星野ピアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌って！ オンガクの妖精！

【Nコード】

N7201P

【作者名】

星野ピアス

【あらすじ】

高3のこまこが買った黒猫のマスコットは、超絶美形な音楽の妖精だった！？

音楽の妖精は小さいころから歌手になりたかったこまこの願いを叶えてやろうと言ってきて――。

音楽の世界で繰り広げられる成長、友情、恋……そして妖精！？

プロローグ（前書き）

ある時ふと思いついた作品です。

初めて書く雰囲気の小説なので、悪戦苦闘中です。

それでもがんばっていこうと思います！

プロローグ

純白のドレスに包まれた一人の少女が、暗い闇の中の舞台裏に立っていた。

「こまこ、お前の出番だぞ」

一人、そこにいるはずの少女に、どこからか男の声がかかる。周りには誰もいない。

「わ、わかつてるけど……足がすくむよぉ」

少女は舞台のほうから聞こえる歓声に耳を傾けながらもそう言った。言葉のとおり、少女はどこか小刻みに震えているようだった。

「どうしてよりもよってあのスーパーユニット？ノクターン？の次なのぉ」

弱弱しく言う少女に、姿が一向に見えない誰かが喝を入れた。

「弱気になるな！ 堂々としている！ 俺がついているというのに、お前はいつまでそんなにうじうじしている！」

少女は手に握ったマイクにくくりつけられた、小さな黒猫のマスコットを見た。音符を持って笑みを浮かべるマスコットの猫をしばらく見た少女は、ゆっくりと顔を正面へ向け、導きの光が見える方へ、一歩一歩進んでいった。

「そうだ、臆することはない。お前は俺が選んだ女だ。全ては、お前のために用意された舞台だ」

少女が足を進めるにつれ、光と声が全身にしみわたってくる。

「さあ、歌え。音楽はお前のためにある」

光が少女を包み、開けた視界にはひきつめられた人の姿が映る。人々の視線はすべて少女に集まり、適度な歓声の後に静粛が訪れる。

全ての音がやみ。全ての音が、少女に託される。

「お前は音楽の世界で……歌の妖精になるのだ——」

少女にしか聞こえぬ声が、全身に駆けめぐり、鐘のように鳴り響

く。

音が、音が、音が、

溢れ出していく――。

第一部 黒猫のメロディ

ある日見つけた黒猫のマスコットは、ひときわ目立って見えた。手に取ると、このマスコットが欲しいという感情に駆られ、少ないお小遣いで買ってしまった。

そんな些細なことで人生が変わるなんて、？朝霧 こまこ？はその時知る由もなかった。

「いやー。こまこさん。素晴らしい歌声でしたね」

夕方に毎週ある生放送の歌番組の中で、男のMCが拍手と共に賞賛してきた。

その言葉を受け取った栗色の長髪を持つ少女——？朝霧 こまこ？は、にこりと笑って礼を述べた。

「やはり才能をお持ちの人物でしたね。初めて歌番組に出た時は、あの？ノクターン？の次だったというのに、それに劣らぬ歓声だったとか……。しかもその歌番組のオンエアがあった日からこの子は誰なんだという問い合わせが殺到！ いやはや、まさに今乗りに乗っている清纯派歌手ですね」

少しの紹介を交えながら言われた言葉に、MCの仕切りの上手さがうかがえる。

こまこは定番になった純白の衣装をまとうせながら、MCの男に笑いかけた。

「そんなに褒められると照れますね。それに、まだまだ新人ですから、ノクターンのお二人方には遠く及びませんよ」

謙遜とも聞こえる言葉に、MCはさらに続けてこまこを持ち上げ続ける。

「いいいえ、そんなことはありませんよ。聞けばノクターンのお二人方も、あなたを認めているとか」

探りも入れてきたMCに、こまこは相変わらずふんわりとした笑顔で答える。

「認めてくださったのかどうかは、私自身よくわかりませんが、そうであれば嬉しいことですよね」

黒猫のマスコットをつけたマイクを持ちながら、こまこはリズムを崩さず答えていく。

そんなこまこを見ていたMCは、やはりその黒猫へと話を変えてきた。

「こまこさんはいつもその黒猫をお持ちですよ。一部のファンの間では、？黒猫のこまこ？なんて呼ばれていますよ。なにか思い入れでも？」

観客もそれは気になるようで、静かになって話を聞こうとする。

「これは……お守りのようなものです」

こまこはそつとその黒猫を撫で、次にMCの方を向いた。

「このマスコットは……私に勇気と自信をくれるんです」

その時のこまこの笑顔は、きらきらキラキラと輝いていた。

第二部 黒猫のメロディ

生の歌番組を終えたこまこは、自分の控室の整理を行っていた。
この後も取材があったり収録があったりするので、その現場に行かなければならないのだ。

マネージャーが駐車場で待っていてくれるので、なるべく早く済ませなければならない。

「こまこ、先ほどのあの言葉……俺に対する好意と受け取るが、異論はないだろう」

マイクからこまこの鞆へとくりつけられた黒猫のマスコットが、かすかに揺れる。

その言葉に、いそいそと部屋の片づけをしていたこまこは、動きを止めぬまま流して言った。

「ある！ 好意で言ったわけじゃないもん！」

それだけ言うときまこは黙々と身の回りの物を鞆に詰め込み始める。

黒猫はしばらくの間沈黙を続けると、？こまこ？と、少女を呼んだ。

「な——」

なにと言おうとした瞬間、こまこは後ろから誰かに抱きしめられる感覚に、目を丸くした。

「素直に認めれば良いものを……先ほどのあの笑顔、俺に向けたものではないなどと言わせないぞ」

その声は、先ほどまでこまこと話していた男の声だった。

こまこはちらりと後ろの人物を見やると、むうと口を尖らせた。

「だからちがうよ」

驚きが冷めたこまこは淡々と男をあしらう。

黒き艶やかな髪を持ち、端正な顔立ちをも持ちえた男は、透き通る美しい声を、その魅惑的な唇から発してみせた。

「つれないな」

どこか噓っぽく笑った男は、こまこを自分の腕の中から解放した。「それより、無暗にその姿になったらいけないって言ったよね、クロム」

クロムと呼ばれたその男は、近くにあつた椅子に寄りかかった。

こまことは対照的な黒のロングコートをまとったクロムは、目を細めて笑いかけてくる。

「言ったが、俺はそれを承諾した覚えはない。俺は俺の好きなようにする。たとえ、お前の頼みであつてもな……」

クロムの微笑みは人形のように美しく、神秘的なものだった。異性はこの笑顔を見たらイチコロだろう。だが、こまこは平常心を保ちながらクロムの相手をする。

「少しくらいお願いを聞いてくれたっていいと思うんだけどなあ」
荷物の整理を終えたこまこは、自分の鞆を持ってクロムの前に立った。

「はい、クロム。元にもどって」

そう言うのと、こまこはクロムの目の前に手を差し出した。

クロムはそれを見ると、一つのため息をついてこまこを見上げた。「音楽の妖精である俺をこんな扱いにするのは、きつとお前だけだぞ、こまこ」

それを言ったと同時に、クロムを包むようにして現れた光が、こまこの視界を奪う。

視界が元に戻ると、目の前にクロムはいない。代わりにこまこの手のひらには黒猫のマスコットがぼつりと乗っていた。

「さっ、お仕事お仕事」

こまこはその黒猫を鞆に付けると、扉を押し開け小走りに廊下を駆けて行った。

第三部 黒猫のメロディ

歌番組の収録を終えたこまこは、一人事務所の廊下を歩いていた。今日の仕事はもうないので、帰ろうとしているところだった。

「朝霧こまこお！」

後ろから大声で名前を呼ばれたこまこは、ゆっくりと声のする方へ体を向けた。

「こんばんは。赤羽先輩」

こまこはこちらに近づいてくる男を見るとそう言った。

茶髪の髪をつんつん立たせ、沢山のアクセサリを身に着けている。奇抜なファッションは、彼をよく目立たせていた。

アイドルユニット？ノクターン？の1人である？赤羽^{あかはね}海斗^{かいと}？だ。こまこの事務所の先輩でもある。

「お前え！ 今日もいい歌うたいやがって！ 俺様をコケにしているのか！」

そんなことを言って近づいてくる海斗の後ろには、丸い雰囲気^{きうき}の男が付いてきている。

「海斗。それむちゃくちやだよ。……ごめんね、こまこちゃん。ほんつとに騒がしい奴で」

柔らかい茶色の髪を持つ美しい男、？菊池^{きくち}涼香^{すずか}？は、笑顔のまま海斗の頭をおもいつき叩いた。

「つてえ！ 何すんだよ涼香！」

海斗は涼香の方を、鋭く睨みつけた。

そんな海斗を涼香は無視すると、こまこの方へと寄って来る。

「相変わらず、綺麗な歌声だったね。こまこちゃん。きっとその声のように、心も綺麗なんだろうね」

涼香はこまこの肩をとり、自分のほうへと引きつけた。

「！ 涼香！ お前何やってんだよ！」

海斗は、涼香の手をこまこから無理やり離れた。そして再び睨め

つける。

こまこはその間、何も言えずに二人を見ているだけだった。

「何って、褒めてるのさ。君のお手本にもなったんじゃないかな。女の子を正しく褒めるほ・う・ほ・う」

ウインクをして唇に人差し指をのせる涼香の姿は、なんともいえない美しさだった。女の子ならきつとメロメロなのだろうが、その仕草を向けられた相手は、今回男だった。

「や、やめろよ！ 鳥肌が……！」

それを見た海斗は自分の体を抱き、恐怖の面持ちで涼香を見ていた。

「コンビ水入らずの所を邪魔しちゃわるいので……私は失礼した方がよさそうですね。」

「いや！ いい！ ここにいていい！ というかいてくれ！」

「そうだよ。男二人じゃつまらないと思ってたところなんだ」

海斗は助けを求めているようだが、涼香はただ純粹に、傍に女の子を置いておきたいらしい。

「……」

こまこはしばらく黙った後、にこやかな笑顔で二人を見た。

「先輩方がそういうなら……」

こまこは二人の先輩の横に並んで歩き出した。

「そつえば、お前っていつもその猫と一緒にだよな」

海斗がこまこの持つてる鞆についた黒猫を指差した。涼香もその猫を見て、なぜいつも持ち歩いているのか気になったようだ。

「はい。大切なお守りですから」

満面の笑みを向けてそういうと、海斗は少し顔を赤く染まらせそつぽを向いた。

「？」

こまこはその行動の意味がわからず、海斗をじつと見つめながら首をかしげた。

「ねえねえ、こまこちゃん。今日一緒にごはん食べにいかない？」

夜ご飯まだでしょ？」

きらきら光る笑顔を向けられたこまこは、それにつりあうような極上の笑みを見せた。

「嬉しいです。でも、マネージャーが男性の方と一緒にごはんを食べないようにつて。だから、ごめんなさい」

その言葉に、一人そわそわと落ち着きのなかった海斗の肩が、ほつとなでおろされた。

「そっか。こまこちゃんは今すごい人気だからね。スキャンダルなんていうのは避けたいんだろうね。用意周到なマネージャーさんだ」
涼香は肩をすくめると、こまこの耳元に口を寄せた。

「じゃあ、また今度誰にも見つからないように行こうか。もちろん、二人きりで」

耳にかかる息が、こまこをくすぐったくさせる。

耳元で囁かれ、自分だけに向けられた口説きにもかかわらず、こまこは恥ずかしそうもせず頷いて見せた。

「そうですね」

こまこの反応に、アイドル二人組はキョトンとした。

「あ、じゃあ私はこっちなので失礼しますね。赤羽先輩、菊池先輩、お疲れ様でした」

こまこは廊下の分かれ道でそう言うと、二人にお辞儀をして去っていった。

「……恋愛キラーの僕の手をあっさり抜けてくれたよ……こまこちゃん」

何が嬉しいのか、とても楽しそうな顔で笑う涼香に、海斗は言った。

「それ自分で言うのかよ」

こまこの後ろ姿を見ながら、海斗はため息をついた。

「でもま、こまこちゃんって恋愛に疎そうだね。それ以前に、興味ないのかも」

ひとしきり笑った涼香は、海斗と同じようにこまこの後ろ姿を見

つめた。

「あいつ、恋愛の歌なんて一つも歌わないからな」

海斗の言葉に涼香は頷いた。

「そうだね。なにか理由があるのかもしれない」

小さくなる少女の背中を見ながら、海斗と涼香はうつすらと目を細めてみせた。

第四部 黒猫のメロディ

こまこが事務所の裏側から外へと出ると、目の前に黒い車が一台止まっていた。その車には、黒のスーツを着こなした一人の男が寄りかかっていた。

片手に煙草を持ち、一服中らしい。

こまこはその姿を目に入れると、笑顔で男の名前を呼んだ。

「柏木さん」
かしわぎ

名を呼ばれた？ 柏木 かしわぎ 誠司？ は、黒髪を揺らしながらこまこの方を向いた。

「終わったか、こまこ。お疲れ様」

柏木はケータイ灰皿を内ポケットから取り出し、煙草の火を消した。

その姿は大人の男性という感じで、とてもかっこいい。

「どうしてこんなところにいるんですか？」

こまこの直球な質問に、柏木はハハツと笑った。

「これもマネージャーの仕事だよ。……ま、こんな暗いのに、女一人で帰らせるわけにもいかないしな」

そう言うと、柏木は車に乗り込んだ。こまこも相手の好意を快く受け入れ、同じくドアを開けて乗り込む。

車の中はほんのりと煙草の匂いがした。

エンジン音が鳴り、車が前へと進みだす。

こまこは外の景色を眺めながら、先ほどの出来事を柏木に話し出した。

「さつき菊池先輩にお食事誘われたんです。……でも、柏木さんの言いつけどおりお断りしましたよ」

夜の景色は幻想的で、美しかった。光が幾つも集まり、なお綺麗だ。

「酒も飲めないがきんちよが、いっちょまえによく誘うな」

柏木のかすかな笑い声が聞こえたこまこは、景色から目を離し、車を運転する柏木の姿を見た。

「がきんちよって……あと一年もすれば先輩たちはお酒を飲んでもいい年ですよ。私だって十八ですから、もうすぐ大人です」

少しむくれたような顔をしたこまこの顔を、鏡から見た柏木はまた笑った。

「二十歳になったからって大人になるわけじゃないぞ。俺だっていまだに実感がわかない」

柏木の言葉に、こまこは首をかしげる。

「?」じゃあ柏木さんは二十八歳の自分がまだ子供だと?」

「いや、そーゆーわけじゃなくてな……」

こまこの素直な考え方に、柏木は言葉が詰まってしまふ。

柏木の言葉を詰まらせた本人は、訳がわからないようで、かわいらしい目をずっと柏木に向けていた。

「……まあ、食事を断ったことはえらいと褒めておくよ。もし一緒に食べに行つて恋に発展つてことになったら困るからな」

その言葉に、こまこは無垢な表情のまま柏木に言った。

「心配しないでください。柏木さん。恋とか愛とかそんなくだらないものに時間をかけるくらいなら、仕事しますから」

年頃の娘があっさりそんなことを言ったものだから、柏木は一瞬目を丸くした。だがすぐに元の表情に戻る。

「くだらないはいいすぎじゃ……まあ、そのほうが俺の都合にはいいんだが。でも、お前、前にノクターンと話すときはすごく緊張するとか言つてなかったか?」

柏木の声に耳を傾けたこまこは、笑顔で答える。

「はい。でもそれは、敵にまわしたら怖い人たちだと思ったから……」

「怖い?」

柏木の素朴な疑問に、こまこは平然とした顔で言った。

「ノクターンの二人に嫌われたら、その力で私、事務所から追い出

されそうですし」

本気とも思える声音の言葉に、柏木は薄く笑ってみせた。

「さすがにそれはないんじゃないか」

「充分にありえます」

真剣な顔で言ったこまこを鏡から覗いた柏木は、我慢が出来なくなつたように声を上げて笑い出した。

「なっ、どうして笑つてるんですか！」

怒り気味にこまこが声を荒げると、柏木は？悪い悪い？と言って彼女をなだめようとした。

「突飛なことを真面目な顔で言うもんだから、つい」

いまだ爆笑し続ける柏木に、こまこは顔を赤くさせる。

「失礼ですよ。柏木さん」

ついでに頬も膨らませたこまこは、そっぽを向くようにして窓の外に見える夜景を目に入れた。

「こまこはおもしろいな。仕事が終わると急に人が変わるからな」

柏木は褒めたつもりで言ったようだが、こまこはそうは受け取らなかった。

「なんですかそれ！ 私はいつでもしつかりしてますからね！」

子供らしい態度を見せるこまこを見た柏木は、まるで妹をかわいがるような声で言った。

「そうだったな。悪い」

笑いをもらして言われた言葉に、こまこはもっと頬を膨らませた。

「もう」

そんな会話を聞いていた黒猫は、一人静かに笑みをこぼしていたのだった。

第五部 黒猫のメロディ

「ただいまー……」

マンシヨンの我が家のドアを開けて帰ったことを知らせるが、言葉を返す者はいない。独り暮らしとしては広すぎる部屋の中にあるソファーに、こまこは腰をおろした。

するとバックについていた黒猫マスコットが光り、男の姿に形を変えた。

艶やかな黒髪。整った顔の男が、こまこの隣に座り込む。

「今日の歌はよかった。満点をやろう」

機嫌がいいようで、鼻歌を鳴らしたクロムにこまこはむうと頬を膨らませた。

「クロムに満点もらったって嬉しくないもん」

こまこはガラス張りのテーブルの上にあったりリモコンを取ると、テレビをつけた。

「手厳しいな。……思ったんだが、俺はお前意外には見えないだろう。それなのになぜマスコットでいなければいけないんだ」

顎に手を当て考える仕草をして見せたクロムに、こまこは淡々と語ってみせた。

「仕事現場で周りをうるちよろされたら、見えてる私だけが気が散っちゃうでしょ。そんなのやだもん」

リモコンのボタンを押しながらチャンネルをかえるこまこに、クロムはなるほどと呟いた。

「……このテレビに映っているのはいつもこまこにかまってくる男二人じゃないか」

テレビに映った海斗と涼香を見て、クロムはそう言った。

こまこはチャンネルを変えるのをやめ、クロムと一緒に先輩二人が映っている歌番組を見た。

音楽が鳴り始める。

澄んだ木の匂い。風のハーモニー。その音楽ひとつで全てのものが感じられる歌声。

顔だけのただのアイドルなんかではない。その歌声は本物だ。憧れ。

この二人へと向けるこまこの感情は、そこから始まった。

今こまこがいるこの場所は、二人がきっかけだった。音楽の魅力に魅せられて、この世界へ飛び込んだ。

そしてそのために力を貸してくれたのはクロムだった。

「ねえ、クロム」

こまこはテレビに映る先輩二人を見ながら小さな声で言った。

「私は歌が好き。大好き。それは絶対に変わらない」

唐突な発言にも関わらず、クロムは極上の笑みでこまこの言葉に返事をした。

「だから俺はお前の傍にいる。音楽が、オンガクの妖精おれを引き寄せる」

こまこはそれを聞き、少し笑みを見せた。

「そうだね」

それから二人の間に言葉は行きかかなかった。それでも、その空間は不快を感じさせるものではなかった。

第六部 黒猫のメロディ

歌の収録があるスタジオへと足を踏み入れたこまこは、関係者以外立ち入り禁止の光沢ある廊下で辺りを見回していた。

ボーイッシュな帽子に合う服装をして、手には小さなバック。そこにはいつものように黒猫のマスコットがぶら下げた。

「柏木さん。遅いな」

知り合いに挨拶をしてくると言った柏木を待っているこまこは、マネージャーの帰りが遅いことに少々戸惑っていた。

こまこはまだ新人なので、このスタジオにくるのは初めてだし、知らない顔の人ばかりだ。不安になるのは当然だった。

「まだかな……」

こまこが白の廊下ををじっと見ていると、いきなり後ろから誰かがぶつかってきた。

「ちよつとお。そこでばーっと立っていないでくれるう？」

後ろを振り向くと、自分より背の小さい巻き毛をツインにしているかわいらしい女の子がいた。緑の黒髪に零れ落ちそうなほど大きな瞳。そこらへんには滅多にいない愛らしい女の子だ。

「いちごちゃん！」

こまこはその人物を見てホツとしたような顔になり、？相沢いちご？の手を取った。

「いちごちゃんも？歴代音楽大賞！？の収録なの？」

いちごはこまこと同じ事務所で、同じ十八歳。そして同じ年にデビューしたアイドルである。それだからか、こまこは親近感を覚えとても慕っているのだが、当のいちごはこまこを嫌っているようなのだ。

「そつに決まってるでしょ！このいちごちゃんよ！音楽の番組

で呼ばれないことはないじゃない！」

いちごは荒っぽくこまこの手を払いのけ、つんとそっぽを向いた。
「ノクターンのお二人も来てるみたいだけど、あんたになんか近づかせないだからね！」

いちごはこまこと同じようにノクターンに憧れているのだ。そして熱狂的なファンでもある。

「へ？」

いちごの言葉がやきもちから来るものだとかまこは知らない。

他人から見ると、こまこはともノクターンの二人にかわいがられているように見えているのだ。だからいちごはこまこを敵視しているのだ。

「とにかく！ 絶対に阻止するんだからね！ いちごは言ったことは必ずするんだから！」

それだけ言い残すと、いちごはさっさと歩いていてしまった。

こまこは瞬きを繰り返していちごの後ろ姿を見送っていた。そして首を横に傾けると、再び柏木を待つ態勢に入った。

『あの女の言動はつくづくわからないな。同じ女として気持ちから分らないのか？』

頭の中で響くクロムの声に、こまこはふるふると首を振ってみせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7201p/>

歌って！ オンガクの妖精！

2011年8月8日22時29分発行